

展 覧 会 評

森鷗外と美術

青 木 茂

明治三十二年末に小倉で鷗外・森林太郎は「訃音を得た時の雑感」に「〇嗚呼原田直次郎君は逝いた。若し明治の油画が一の歴史をなすに足るものであるならば、原田の如きは、必ずや特筆して伝ふべきタイプであるだらう」と書いた。それから百余年し、鷗外の声に舒して『森鷗外と美術』展が開かれた（島根県立石見美術館、二〇〇六年七月八月、のち和歌山県立近代美術館、静岡県立美術館に巡回）。最初に石見で開かれたのは、医師、軍人、官吏であった鷗外の最後の文学的営為「遺言」に残した「余ハ石見人森林太郎トシテ死セント欲ス」とした生まれ故郷石見だからである。多面体鷗外のひとつの面を捉えようとする展覧会は成功したようである。

「明治の油画が一の歴史をなすに足るものであるならば」と鷗外は書いたが、それから一世紀を過ぎて貧しくとも「明治の油画」は「一の歴史をな」している。二〇〇六年には『長沼守敬とその時代展』（萬鉄五郎記念美術館、一関市博物館）、『浅井忠と関西美術院展』（府中市美術館、京都市美術館）、『中村不折のすべて展』（長野県伊那文化会館）、『素描する人々―或る日の洋画研究所』展（目黒区美術館）、それにこの『森鷗外と美術』展などである。それぞれあまり豊かではない地方文化財政のなか、いずれも学芸員たちの調査研鑽の積み重ねを表現した展示会であった。鷗外と美術について思うとき先づ思い浮ぶのは、留学中のミュンヘンで生涯の親友となった原田であるが、長沼守敬が原田と会ったのもミュンヘンであり、長沼は鷗外の旧藩主毛利一族の肖像をのちに彫刻している。原田をガブリエル・マックスに紹介したのは松岡寿であるが、そこで古典的技法を習得した「旧派」の原田が早世したあと「旧派」の代表となったのが松岡や浅井忠であった。浅井が創設した関西美術院と、そこでの或る日のデッサンする若い画学生の真摯な姿が展示されたのも二

〇〇六年であった。鷗外の「遺言」には先きに引いたのに続けて「宮内省陸軍皆縁故アレドモ生死別ル、瞬間アラユル外形的取扱ヒヲ辞ス 森林太郎トシテ死セントス 墓ハ森林太郎墓ノ外一字モホル可ラズ 書ハ中村不折ニ依託シ 宮内省陸軍ノ榮典ハ絶対ニ取りヤメヲ請フ」としてある。東京三鷹市禅林寺には遺言どおりの小ぶりのお墓がある。『中村不折のすべて展』図録には鷗外が洪江拙斎「述志之詩」の揮毫を不折に依頼した時の原稿や、『不折山人丙辰潑墨 第二集』（大正五年、中央出版協会）巻頭の鷗外の題詩が掲載されており、鷗外の文字はふたつながら六朝風の楷書である。

多面体鷗外の重要な一面―美術と鷗外を語ろうとした野心的な試みがこの『森鷗外と美術』展である。巡回した三館の学芸員が協力して、僅かな先行展と美術の側からする僅かな鷗外研究をこえて近代日本美術史を見直そうとする意欲も伝わる展覧会になっている。展覧会は二部と資料によって構成されている。「第一部 芸術で結ばれた友情 原田直次郎と共に」「第二部 芸術がもたらした栄光と活躍 鷗外の多面性」「原田先生記念帖」を編集した森鷗外の遺志を継「ごうとして編集した「資料 原田直次郎作品集」である。

鷗外の留学時代（明治十七〜二十一年）についてはその「妄想」に

自分がまだ二十代で、全く処女のやうな官能を以て、外界のあらゆる出来事に反応して、内には嘗て挫折したことのない力を蓄へてゐた時の事であつた。自分は柏林にゐた。

とある。十九年ミュンヘンに移り、十七年以来ここにあった画学生原田を三月二十五日に訪問し、生涯に亘る親交を結ぶことになる。原田は二十年に帰国し鷗外は翌二十一年に帰朝するが、原田は三十二年末に享年三十六で早世する。その間、原田は小林萬吾、和田英作らを指導し、明治美術会展に出品を続けたが後半は病床にある日が多かった。鷗外は旧派原田の「理想画」を擁護し続ける。展覧会第一部は旧派・脂派・変則派の頭領だった原田の生涯と作品を中心に、新派・紫派・正則派の

黒田清輝らの白馬会派の登場とともに展示して日本洋画史を展望している。黒田が「未だ画を始めないか、又はやつと始めて居つた」ころ、「画を以て成功し」た原田が帰国の途次バリの公使館の夜会で、黒田は遠くから原田の話聞いた（『原田先生記念帖』）。二十六年に帰国した新派の黒田と旧派の原田との差は、このように数年を出なかつたが、日本社会の西欧への急傾斜は、原田の西欧の伝統に比肩する技法を習学することなく性急に交替を迫つたのであつた。原田の「靴屋の阿爺」を展覽会解説では「西洋絵画として完成された質の高いこの肖像画は、日本人が初めてその伝統に肩を並べた記念碑的な作品」とする。実際、この作品での原田の対象把握の強さと絵画技法の体得は日本人の作品ではその後にも比べるもののない傑作である（会場には伊藤快彦によるこれの模写、岡倉秋水による芳崖作「悲母観音」の模写も展示されたが、当時の模写は習画の基礎のひとつである）。

観音といえば原田の作品では最も有名な「騎龍観音」（一八九〇年作、護国寺蔵）が展示されなかつたのは、それこそ画龍点睛を欠いたかに見えた。東京国立近代美術館に寄託されている作品であるが、関係者が『鷗外と美術』展の重要性や意義を理解するならば、信用できない言い訳で貸出を拒否するよりは展示に協力すべきであつたろう。個人にしる機関にしろつまらない展覧会に所蔵作品を出品する必要はないが、企画に協力し推進した方がよいかどうかぐらいの判断を所蔵者が持たないでは文化財は保護できない。

原田が第三回国勧業博に出品した「騎龍観音」について外山正一が実在しないものを描く宗教画を否定したのについて、獅子のごとく全力で反論したのが鷗外であつた。鷗外の幅広い学識と辛辣さに対応できる評論家は日本にはいなかった。現在となつて思えば鷗外が援用したハルトマンの美学は保守的な十九世紀の美学であつたし、宗教画、歴史画は市民的ではなくならうとしていた。思想、技術の先駆者は「性急な交替」を強いられた後衛にされようとしていたのである。このあたりのことは鷗外の全集本を思わせる瀟洒なあかぬけた装幀の図録の解説を一読されたい。作家作品解説には原田の画塾鐘美館への最初の入門者水野正英の生涯とその作品について、推定をまじえながら時代相まで浮かぶように記されており、更に渡部審也作とされている「猿曳図」を水野の作と推定できる可能性を指摘するなど読む者の

空想と研究心を掻きたてる記述がある（私の空想では「猿曳図」の井戸や柿の木から描かれたのは原田の屋敷とその家族ではないか、となる）。

図録に雑誌『美術評論』（明治三十年十一月―三十三年三月、全二十五号）の批評欄「無扉門」の評者のひとり 糕阪（すなわち団子坂）の発言を鷗外としたのは画期的であり、うれしいことである。これについてはゆまに書房の近代美術雑誌叢書にある『美術評論』の別冊になつてゐる美術書誌家森登による「解説」（一九九一年四月）を引くと、

筆者は「一九八六年度 神奈川県立近代美術館年報」に、本誌の「総目次」と「美術評論と森鷗外」という小文を草した。その折の筆者には、本誌に対する鷗外の並々ならぬ力の入れようが驚きであり、その足跡が鷗外研究の中で全く欠落していたのが、さらに驚きであつた。

となつてゐる。『めさまし草』と『美術評論』とは鷗外の多彩な文学・美術評論の明治三十年前後の両輪である。鷗外の全集には『めさまし草』の文章は巨細となく採収されているが『美術評論』からは何も採られていない。黙殺しようと無視している。例えば黒田清輝「智・感・情」について「敬服いたして居る一人である」鷗外は約五ページに亘つて西洋美術の知識を披露し、時に「さりとて私は裸体といふものを、そつくりその儘に難有いものと思はぬ」と私情を洩らしたりしている。文学の面からも、美術の面からも『美術評論』研究をはじめねばならないだろう。

展覧会第二部は「芸術がもたらした栄光と活躍」である。文部省美術展覧会審査委員、陸軍軍医総監、帝室博物館総長兼図書頭という頭職を兼任した鷗外の同時代、あるいは関係者の作品が展示される。木下杢太郎は当然だが村山槐多も関係者である。博物館での業績に照明をあて、著者の装丁なども示されている。多くの作家がとり上げられているが鷗外の作家・作品についての好悪は分明ではない。そこが鷗外の偉い所なのであるが、嘗て挫折したことのない青春と異国での自由だった日を深く蔵して、原田をいつも護つたが、所蔵美術品などは意外に少なく清

廉潔白人であったことが解る。しかし、第二部では鷗外と美術というより医学・軍隊と美術の関係を捉えようとしたのは初めての意欲的な試みで、珍しい作品によって美術の多面性を考えさせたのは高く評価されよう。

ここで私は全く個人的な感想を以下に述べたい。鷗外が日露戦争に第二軍軍医部長として戦陣にあった日々に吐露されたうたを集めた『うた日記』（明治四十年九月、春陽堂）の復刻版（昭和四十九年三月、日本近代文学館）を私が手にしたのはよほど以前のことである。それとは別に私は国木田独歩の『戦時画報』（明治三十七年二月十八日創刊）を小杉未醒の木版挿絵のゆえに集めていたので、『うた日記』の写真版挿絵多数は緑子・蘆原曠であり木版多色刷一点は寺崎廣業であることはすぐに判ったが、石版多色刷八点を渡部審也と思ひこみ、装丁も或いは審也かと思っていたのであった。『森鷗外と美術』展が開催されたと知って改めて石版画のサインを注意して見れば久保田米斎らしいと判った。不明を恥ぢて私は『うた日記』を読み直した。緑子の絵画写真版は三十点でほかに撮影者不明の写真からの写真版が七点、以上の四十六点は一ページ一点裏白で、五種類のカットは画者不明である。B6判よりやや小型で本文四八七ページ、箱付き布装。装丁は『萬朝報』明治四十一年元旦号を迫内祐司さんが探してくれて斎藤松洲と判明した。その記事は「昨年刊行されし書籍装釘意匠抜群のもの」三点のうち松洲の「『うた日記』は一面に銀泥を置き开を代緒の芭蕉布もて蔽ひ隅に小さく群青色の雁に菊の模様を金版にて打込みたり、芭蕉布の下より仄に銀泥の輝く所甚だ上品なり、左れど見返の紙も模様も下品なるは瑕なり」というもので、現在は銀泥は焼けて輝きはない。また箱にも表紙にも松洲独特のサインはない。

『うた日記』は「ひた上に青柳の枝折り敷きし夜の月の下、木がらしに波立つ天幕の焚火のほとりに、鉛筆して手帳の端にかいつけられし」（自筆広告文）新体詩五十八篇、訳詩九篇、長歌九首、短歌三百三十一首、俳句百六十八句と算えられているアンソロジーである。全体は五部からなるが三十七年三月広島での「第二軍」から、三十九年元旦に鉄嶺での「書初や 檄を草せし 去年の筆」、「凱旋や 元日に乗る 上り汽車」までの戦陣のうたが、ページ数で七割を占める第一部が「うた日

記」である。日付順に配列した詩歌をもつてする日記で、遼東半島上陸から南山・沙河・遼陽・奉天などの会戦に参加した鷗外の行路と心情を窺知することができる。鷗外は時にロシアを憎み、ロシア兵の死を悼み、戦塵下の現地の人びとを哀れみ、青春の想い出の濃いボタンを落として哀惜し、日本の肉親を夢みる。

鷗外研究者の『うた日記』評価はなぜか低いというが、佐藤春夫は「陣中の豎琴は殆んど自ら鳴つた……作者の精神と気魄とまた戦場の情景とを一層端的に露出し得て句句みな躍動するを覚える」と高く評価した（「陣中の豎琴」、昭和九年三月『文芸』二巻三号、改造社）。しかし、この長篇評論は集中の「唇の血」「罌粟、人糞」「ほりのうち」に伏字があり、鷗外の全集や既刊本から引用した佐藤春夫は改造社に不満だったところ、昭和書房の同意を得て、昭和九年六月に旧菊判変形の、副題に「森林太郎が日露戦争従軍記念詩歌集うた日記に関する劄記」をつけた「陣中の豎琴」の三百部限定本を出版する。これは伏字を復原し、森於菟の「父鷗外の陣中消息と凱旋」を附録した百五十七ページの図書であるが、私たちが喜ぶのは原色版を含む十点の留守家族への絵葉書が挿絵として収められていることである（『うた日記』には明治三十八年四月二十五日於奉天の前書のある「絵はがきや 春の朝餉の膳の上」の句がある）。『陣中の豎琴』巻頭の寺崎廣業の負傷兵に包帯する看護兵の図肉筆絵葉書（挿図1）には「○此画は従軍画匠寺崎廣業氏の写生に候」とあり、二十七年六月十五日に尖山子で書かれたものと見える。ほかに非常に美しい原色版の橋本邦助、M.K.サインあるもの、二世五姓田芳柳、Eのサインあるもの、単色の南山戦闘記念絵葉書二葉、遼陽戦闘記念端書などが載せられている。

寺崎廣業については後述するところもあるが『うた日記』の挿絵に戻れば、挿絵した画家たちはあらかじめ示された詩歌の活字組見本を読んでその対向ページに挿絵したようである。例えば自筆広告文にあるような「つはものの 手に手に折りて敷寝せる 青葉の上に 月照りわたる」（明治三十七年七月八日於前安平）を図解したような絵（挿図2）を緑子・蘆原曠は、あまりうまくはないが三十枚描いたのである。緑子は明治二十九年七月から不同舎に学んだが、三十七年二月『戦時画報』記者となり、佐世保、宇品で取材していたが十月二十五日遼東半島に上陸、沙河を挟んでの日・露三十五万が対峙しての冬營の日を送る、その陣営で不同舎出身の従

軍画報記者横井俊造と偶然に会ったりしている。三十八年三月の奉天会戦を取材報道し、のち体調をくずし四月六日に宇品に着岸している。緑子が『戦時画報』二二号（三十七年三月一日）から五十九号（三十八年七月二十日）までのために描いた巻頭の大判の写真版となった絵画と木版挿絵の総数は四百八十一一点にのぼると計算されている。鷗外は『戦時画報』を見ていたであろうし『うた日記』出版関係者が緑子を用いるのは自然なことであったと思われる。（『旧派』の不同舎出身で『戦時画報』記者となったのは小杉未醒、緑子、横井俊造、木村想平、田内千秋などである。鷗外は旧派とか正則派などという価値観を含む用語を嫌って居住地域による「南派」「北派」を使ったが、時に不同舎出身者を「菊葉派」と呼んでいる。山岡コレクションの岡精一「搜索」、揚忠三郎「北野天神之図」にはローマ字サインの後に菊葉と覚しき葉一枚が描かれている。共に明治二十二年作の油彩画である。鷗外が「菊葉派」といったのはこれらの絵と思われる。）

『うた日記』に多色石版画六葉を寄せたのは久保田米斎である。米斎は米僊の長

挿図1 『陣中の豎琴』所収 寺崎廣業肉筆絵葉書

男、日露戦争に『国民新聞』記者として従軍した金僊は次男。米斎は『原田先生記念帖』に貴重な回想を残している。冒頭部分を引用すると、

私が初めて原田直次郎先生の画塾、鐘美館に参りましたのは明治廿四年十二月七日で京都から東上した二週間後の月曜の午後の事。本郷三丁目の帝国大学、赤門前の煙草屋と憲兵屯所（今は無い）の間を、大通りから横へ折れて、少し傾斜した小路を降つて行くと、直ぐ右側の一構の家が、先生のお宅でした。平家で白茶色ペンキ塗の西洋館と、茶褐色に錆びた茅葺の家と併行に並んでゐる。其和洋の家の間に車井戸があつて、傍に柿の大木が植ゑてありました。門は丁度車井戸の前あたりにあつたのです。

挿図2 『うた日記』所収 蘆原曠写真金属版

挿図3 『うた日記』所収 久保田米斎多色石版

となっていて、先に記した私の空想を馳りたてるのである。それはともあれ米斎も「入海の 氷のうへの 日の出かな」(明治三十八年十二月一日金州を過ぎ旅順に至る)の俳句の対向ページに割れた氷の上の円窓に朱で縁どられた雲と海岸などをデザインしている(挿図3)。

最後に多色木版画を寄せた廣業は「君をおもふ 心ひとすぢ 二すぢの征箭^{そや} 折りくべて たけば烟^{けがり}に むせびてぞ泣く」の歌に応じて青銅の爐に矢を燃やす唐美人を描いている。無学な私はその故事を知らない。

廣業の描いた肉筆絵葉書のことは先に記したが、彼も従軍画家である。東京美術学校教授の廣業は戦況実写のため、鷗外の属していた第二軍司令部に随行し明治三十七年四月二十一日に宇品を出発し八幡丸の船中で森鷗外博士の横顔を画用紙の写

生帖に鉛筆でスケッチしている。展覧会に出品された平福百穂のスケッチ「鷗外と茉莉」と共にけだし珍品であろう。私は『うた日記』三九五ページの対向紙面にある精悍な軍人らしい写真がこの頃の鷗外と思っていたのであるが、廣業の写生によると眼や顔には幼な顔が残っているような柔和な表情である。私はこれを『美術研究』七十五号(昭和十三年三月)の小高根太郎「従軍画家としての寺崎廣業」を見て知ったのであるが、当時この写生帖は寺崎家に伝えられていたという。現在も在ることと思われる。

廣業は五月七日遼東半島に上陸、二十六日の南山攻撃を肖金山頂から観戦する。六月十五日得利寺の激戦があり、十六日尖山子に着く。二十一日、鷗外に『廣業画譜』のための序文を求め、この日のうちに受けとったようである。二十二日廣業は帰国の途につき、鷗外たち軍司令部は北大崗寨まで騎行した。この日鷗外は新体詩二篇「馬の影」、「我馬痛^{わがうま}めり」を作った(引用したいが割愛する)。廣業は二十五日因幡丸に乗り三十日広島に着船。七月十四日東京帰着。二十日、日本美術院の二十日会に出席講演したことになる。

廣業の講演は「遼東観戦談」と題して『日本美術』六十七、八号(明治三十七年八、九月)に掲載される。金州戦後の惨状を語って、

正面の砲台から其辺の砲台へ登つて見ると、実に惨憺たるもので、敵が我兵を苦しめた立派な砲が、右に向き左に向いて壊され、傍らには、砲弾で頭を砕かれたりなんかした敵の屍骸がゴロゴロ転がって居るのを見て、砲台を一廻り廻つて、それから旅順街道へ下りて見て驚いた。其処は敵の退却する時に、我が砲兵に追撃されて、砲弾で撃たれたのが四五百人で、道を埋めて居る。其中には、まだ生きて居るのもあつて、看護卒が綱帯して居ましたのも見ましたが、其惨憺たる状態は逆も言葉に尽せない、実に酸鼻の極であつた。

其時、私は、絵画の上から種々考へて見ましたが、其惨状を其儘むき出しに画に描いた時は何うであらうか、恐らくは人々が側へ寄り付けない、イヤなイヤな画が出来るだらうと思ひます。併しそれを画にして、誰が見ても惨

檐に見えて、そうして美的の観念を起させやうと言ふのには、戦争画に研究のない日本画家の、一大研究せなければならぬ所であらう、と思ひました。真にアノ惨憺を見て、戦争と云ふものはイヤなものだ、と言ふ事が一層よく了解いたしました。

と述べている。戦闘の実況を描けば「惨憺に見えて、そうして美的の観念を起させ」る絵画を廣業は作れたか。鷗外は画譜の序文に「先生遼東に従軍し、大陸の山川を跋涉し、南山得利寺の諸戦を目睹す。先生の画境、それこれより一変するか」と書いた。廣業の——ひいては藤田嗣治の「日本画家の、一大研究」した戦争画が成功したかどうか、残念ながら疑わしい。

ただここに、廣業の従僕として大陸の戦野を馳けた、当時東京美術学校日本画選科に在学中だった三浦孝（号を広洋、また北峽とも）の三十八年の卒業制作は「栄誉ナラズヤ」という。すみれの咲く野に俯仰する日露二人の戦死者の間から、白衣をかづいた足のない観音が天使が昇天するのを描いた絹本の大作である。「惨憺に見えて、そうして美的の観念を起させやうと」勉めた作品に見える。

〔補〕

『廣業画譜』は明治四十三年、伏見宮貞愛の題字、鷗外・露伴の序、「友人大村西崖識」とある「寺崎廣業君の半生」を巻頭に出刊された。このたび『鷗外全集』に当ってみたが『美術評論』の糕阪と同じく入収されていない。せめてはここに録しておく。

叙

廣業画譜成矣。是蒐集先生既往之作者。而譬猶遠行者。暫憩山嶽。一顧來路也。今茲先生従軍遼東。跋涉大陸之山川。目睹南山得利寺諸戦。先生之画境。其自は一変乎。姑書以為他日之左券云。

明治三十七年六月念一 於尖山子軍営

鷗外漁史源高湛識

なお、『不折山人丙辰澱墨 第二集』（大正五年、中央出版協会）に寄せた鷗外の序詩も『鷗外全集』の題跋集や総目索引にはなく著作年表をなめるように見て漸く十九巻の漢詩

の部にあるらしいと判る。この「中村不折画集題辭」は大正六年九月『大正詩文』第四帙第四集にあつて『鷗外全集』の解説である「後記」には「単行本未詳」とある。『大正詩文』などは私は知らない。この詩のタイトルが不折画集の題辭だというのに全集編輯者はどこにもある不折の画集を見ようとしなかったのである。

〔附〕

本文中に引用せず、説明を加えなかった主な参考文献（戦史類を除く）。

- ・『原田先生記念帖』明治十三年一月二十五日、原田直次郎氏記念会（この図書の著者兼発行者は小柴英に、印刷所は審美書院になっている。もちろん実質的な編著者兼発行者は鷗外である。限定百二十部）
- ・寺崎廣業『廣業画譜』明治四十三年七月、審美書院
- ・寺崎廣業『廣業画譜 第二輯』大正六年十二月、審美書院
- ・津田青楓「旅順戦争の日記（明治三十七年）」、『画家の生活日記』大正十三年六月、弘文堂書房、所収
- ・土方定一「森鷗外と明治美学史」、同「森鷗外と原田直次郎」、ともに『近代日本文学評論史』昭和十二年四月、西東書林、所収
- ・土方定一「森鷗外の『独逸日記』とユリユウス・エクステル」、『近代日本洋画史』昭和十六年五月、昭森社、所収
- ・森潤三郎『鷗外森林太郎』昭和十七年四月、森北書店
- ・『森鷗外と原田直次郎展——森鷗外小倉着任百周年記念』平成十一年五月、北九州市立美術館
- ・山田直子「従軍した画家たち——『戦時画報』における不同舎門人の活動」、『女子美術大学研究紀要』三十三号、平成十五年三月

* 「森鷗外と美術」展、島根県立石見美術館、二〇〇六年七月十四日～八月二十八日／和歌山県立近代美術館、九月十日～十月二十二日／静岡県立美術館、十一月七日～十二月十七日